新潟市の花農家さんを紹介します

政令指定都市を記念して新潟市の花に制定された「チューリップ」
実は「新潟市がチューリップ切花の生産量日本一」なのをご存じでしたか?チューリップ以外にも新潟市には、切花・鉢花含め多くの生産者さんがいます。そこで今回は花農家さんを取材してきました。

【食べられるバラ】南区堀掛　『㈱アンジュール』の石附正志さん

3代続く「石附農園」は、古典園芸植物の「オモト」や「イチジク」などの鉢物をメインに生産している。一度は心理学を学ぶため進学を決めた正志さんだったが、高校三年の時、父が他界、大学卒業の頃家業を継ぐ決意をし、亡き父と同じ修行先で経験を積み実家に戻った。
今では新しい取り組みのひとつとして、バラの魅力をより身近に感じてもらおうと「食べれるバラ」に挑戦し、2016年に有機JAS認可を取得、(株)アンジュールを立ち上げた。様々な品種から流行もふまえ食用に向いた色や形を選び、有機JASに基づいて化学物質を使用せず天然物だけの栽培に取り組む。今注目のエディブルフラワーだが、食卓に彩りを添えるだけでなく、栄養価も高くサラダやデザート、ジャムなどの加工品、肌にやさしいバラ風呂としても利用できる。美しく安心安全な「食べられるバラ」は、新潟はもちろん全国展開を視野に奮闘している。取り扱いなどは【ハナラボ】で検索。

【キク】東区竹尾　『皆川農園』の皆川浩明さん

7月初旬、東区竹尾にある皆川浩明さんの畑は、出荷を待つキクでいっぱい。皆川農園は主力の「キク」をはじめ「ユリ」や「アスター」等の切り花を生産する代々続く花農家。生産された花は父の名で出荷され「皆川さんのせがれ」と呼ばれていたが、今では栽培から出荷まで任されている。そんな浩明さん、自分の名で出荷したものすべてが売れ「また頼むね」といわれた時は嬉しかったという。温度管理のできない露地での栽培は、出荷のタイミングを読むことが難しく現在も市場の需要をよみながらの管理に余念がない。休日などない農家ですが、中学生になった息子さんが今では戦力となり手伝ってくれるという。小さな頃から畑で遊び過ごした息子さんにとって、仕事に誇りをもって試行錯誤しながらも楽しんでいる父の姿こそが、最高のお手本なのだ。日本の文化に欠かせない「キク」これからも父から子、孫へ技術と魂は受け継がれるだろう。

新潟市の花の生産地バスツアー今年も開催予定

食育・花育センターでは、毎年花の生産農家などを巡るバスツアーを開催しています。
詳細は決まり次第、「市報にいがた」にてご案内いたします。

食育・花育センターでは、定期的に新潟市で生産された切花・鉢花の展示もしています。

新潟花クイズ（答えは、裏面）★ 難易度

Q1. 日本で初めて新津地区の小田喜平太氏が商業生産に成功した花は？
★ Q2. 新潟市は東洋一の生産量、トゲのある花木は？
★★ Q3. 新潟市でしか生産されていない幻の花。
「阿賀に咲く、白の貴婦人」と呼ばれるユリは？
★★★ Q4. 市場販売量（苗も含む）は全国トップクラス。キンポウゲ科の花は？

【トルコキキョウ】北区椋　『伊藤明さん』

トルコキキョウの出荷量県内一を誇る北区豊栄花卉園芸組合。7月下旬に蒸し暑いハウスの中で出荷作業に追われるのは、伊藤明さん。7月半ばから盆にかけてピークを迎え10月まで続く。華やかな色に幾重にも重なったフリルの花びらはパッと見にはトルコキキョウに見えないものもある。そんな栽培品種選びには生産者の経験に加え、センスも問われるわけだが、市場のリクエストと一致させるものまた実力。「まっすぐ育つものですね」とこちらが感心していると、ニヤリとした笑顔で「生産者がまっすぐだからね」とユーモアたっぷりの返しに、これもまた実力と感心。特に技術と手間のかかるトルコキキョウだが出荷後のハウスは、秋のハロウィン用にヒマワリを栽培予定とのこと。伊藤さん達のおかげで秋にも新潟市産のヒマワリが楽しめます。

A.ヒマワリ /B.ヒマワリとカスミソウ /C.ケイトウ /D.アスター /E.チドリソウ /F.ボケ /G.シクラメン /H.キク /I.ユリ /J.トルコキキョウ /K.クリスマスローズ /L.チューリップ /M.アザレア /N.ポインセチア /O.ラベンダー /P.バラ /Q.ユキワリソウ